

65 唐代における『千金方』の形跡

郭 秀 梅

唐・孫思邈『千金方』は、六五〇年代に成立した後、一〇六六年の初刊にいたるまで四百年間、抄写・引用され、医界に多大の影響を与えた。この間、『千金方』を引用した書は『新修本草』『外台秘要方』『太平御覧』『太平聖恵方』等で、いずれも皇帝の勅命や官廷の官吏により編纂された書物である。したがって当時、『千金方』は決して一般の医者が利用できる医書ではなかっただろう。一方、現存する唐代の医学文献は極めて稀少であるが、本報では唐代の王冰『素問』次注および管股『経効産宝』の引用書に注目し、唐代における『千金方』の流布状況を検討した。

『素問次注』の引用書は一・二六種(篇)あり、主に『素問』『靈枢』系統の内容で、他に儒教・道教の經典もあるが、『千金方』はなかった。確かに『素問』と『千

金方』の成立年代と内容等を考査するなら、両書の関連性が深いと言えないので、王冰が引用しなくても不思議はない。しかし宋・林億等の『素問』新校正注は『千金方』を二二回、孫思邈の説を一四回引用し、王冰注の不足を補充している。『素問』次注と『外台秘要方』はともに七五〇年代に成立するが、『外台秘要方』は『千金方』の内容を大量に引用する。王冰は「弱齡慕道、夙好養生」と自称するので、道教色の濃い『千金方』を参照してもいいだろう。とするなら、王冰は『千金方』を閲覧できなかったと推測できる。

一方、唐の管股『経効産宝』三巻は中国で早くに散佚したが、森立之らの『経籍訪古志』によると、日本には南宋版があったと記録される。一八八一年、中国人の張金城が本書の日本の版木を購入し、中国で印刷した。それを人民衛生出版社が一九五五年に影印し、現在に普及している。当書を調べた結果、『小品方』『経効』『広濟』『古今録驗』『必効』『千金翼』『深師方』『救急』など十種類の医方書が引用された。うち『千金方』は延べ十回ほど引かれ、多くの薬味の用量には玖(九)両・陸

(六) 両などの漢字が使われている。これら引用書目は『外台秘要方』に類似するが、引用文は一致しないので、『外台秘要方』から間接引用された可能性は排除できる。咎殷が『千金方』などの貴重医書を利用する可能性があるか、謎を解くため、史料を探索してみた。

咎殷の伝は史書にないが、多紀元胤『医籍考』所収の唐・周頊『経効産宝』序にその成立経緯が記される。すなわち八四七年頃、節度随軍の咎殷が宰相の白敏中の召に応じ、婦人科の本を編纂した。そして白敏中は本書の簡要を褒め、『産宝』と名付けたという。他方、『唐書』列伝によると白敏中は白居易の従兄弟で、文武両道に優れる人物で、八四六年、著名な宰相の李徳裕に抜擢され、翰林学士・兵部侍郎・中書令・宰相に昇進した。李徳裕は唐の元和年間(八〇六〜二〇)に上柱国を任じた高官・李吉甫の次男である。宋・王応麟『玉海』巻六十三に、「李吉甫伝為淮南節度使、帝為御通化門祖道賜御餌禁方。孫思邈『千金方』三十卷、『撰生真録』一卷」と記載によると、李家には御賜の『千金方』が所蔵されていたことを考えられる。

当史実からすると、白敏中は李徳裕と親密で、李家所蔵の『千金方』を借覧・抄写できた可能性が高い。その後、咎殷が召されて白宰相府に寄寓し、蔵書を参照して『経効産宝』を編纂したのだろう。それゆえ、『千金方』のような貴重文献を利用できたらしい。

以上のように、王冰は『素問』次注の著述に『千金方』を利用できず、百年後の咎殷は宰相の助力があつて使用できた。すなわち『千金方』は成立の後、一貫して上層社会だけで利用されていたことが推測される。一〇六六年に宋政府校正医書局の林億らは孫思邈の自筆本、あるいは模写本を以て、校訂、刊行した後、世に広く流布し始めた。

(順天堂大学医学部医史学研究室・北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究室)